

いの流水俳壇

楳本神社献詠俳句「当季雑詠」

刈谷 志津選

特選

台風の前触れ雨か朝詣で

松林 朝蒼

〔評〕当句会は、年一回秋季に「いの大國さま」への献詠俳句会を実施している。今年は長年「高新俳壇」の選者をされ、有名な松林朝蒼先生をお招きして開催した。句会は九月一日、立春から数えて二百十日目にあたり、台風の襲来の時期で厄日とされている。やはり遙か南の洋上には台風21号が発生。四国方面への進路予報に皆台風の方を案じていた。当日も早朝より雨模様で、揚句はその雨を台風の前兆と感じ「台風の前触れ雨か」と言い表し、下五「朝詣で」は、迫りくる台風が何とか無事に通過することを神に祈願した即吟の一句。簡潔で情景がよく見え、よくわかり伝わる。客観的写生の最たる句に深い敬意を表する。

秋の声玉砂利の音の鎮もれり

植田 紀子

〔評〕大気が澄んでくると、風の葉すれの音、木の葉に当たる雨の音、すべての物音に耳は敏くなる。なお、秋の気配を捉えて「秋の声」とも言う。当日は、楳本神社での俳句会である。揚句の秋の声は作句のため、神がその地に鎮まりいる（下五「鎮もれり」）深閑とした秋の気配の漂う境内に敷かれ、雨に濡れ一際美しい玉砂利を踏む音。中七「玉砂利の音の」を秋の声と捉えた。作者の豊かな感性と表現力で見事に詠みあげた。もの静かで神々しい神域が目に見えぬ。

拍手を大きく打って厄日かな

竹中 良子

〔評〕拍手は神を拝む時に、二回手のひらを打ち合わせて鳴らす。通常、神への礼拝は「二礼二拍手一拝」である。拍手も慣れないと上手に鳴らすことは難しい。しかし、今日は二百十日の朔月（九月一日）の厄日で、大型台風21号も此方向き。また本日は、大國さまへの献句俳句会の日。何としても今日一日は、平穩無事でありませうようにと神殿に拝礼をして「拍手を大きく打って」の表出。大きな拍手は神にも届いたであろう。厄も退散、当日はすべてがスムーズに運び、順調で盛会であった。大きな拍手を打った作者の光る感覚と平明な作品に拍手。

入選

山の水澄めり注げる神の池

絵馬堂に足場の組まる九月かな

神鯉跳ね風は九月となりにけり

秋の空そのまま青き仁淀川

杜に聞く葉ずれの音や秋の声

縁側の手酌嗜む星月夜

絵馬掛のとりどりの貌秋さわや

水切りの石に仁淀川の澄み渡る

風や秋おおきな袋担く神

秋の宮遠い昔が想はれて

一句抄

遥空碑読む人をりて宮の秋

御手洗の大き鏡や秋の声

千羽鶴撰社に祀り震災忌

街角の五階のガラス雲の峰

神鈴の幽けき音や葦の花

仁淀川孤舟流れて秋に入る

神苑の澄みて祝事秋閑ける

秋気澄む鎮守の杜の静けさよ

大國の山に日当たる厄日かな

棕大樹秋天をつく高さかな

神杉の涼風来たり邪気払う

長雨に不安のつるの秋の里

大國の山車引く子等の福俵

水音も亦秋緋鯉真鯉かな

久々に朝顔の花咲きにけり

小鳥二羽追つ追われつ雲の果

見せ合つたみくじの人を想う秋

登校日足うら白き児童達

神苑の鯉すこやかに宮の秋

次題「当季雑詠」

締切／毎月1日

投句先 教育委員会事務局

いの町1700-1

0893-1922

今月のごども川柳

夏休み あつというまに まくとじた

伊野小 6年 塩田 夢芽

〔評〕自分の好きなこと、やりたいことに熱中している時は、時間はあつと言う間に過ぎてゆきますね。心身共に充実した夏休みだったことが想像されます。夏の太陽のように明るい笑顔が浮かんできます。

運動会 今年はぜったい 勝つてやる

伊野南小 4年 井上 仁愛

〔評〕昨年のくやしさが忘れられない。だから今年の運動会には、どうしても勝ちたい。その気持が「ぜったい勝つてやる」の言葉の中に表現されています。きつとすばらしい結果が待っていることでしょう。

二学期は かん字をおぼえ 百点だ

伊野小 2年 中島幸太郎

夏休み 不注意やけどで 丸つぶれ

伊野小 6年 坂井真奈美

川遊び ゴリとり泳いで くつたくた

伊野小 6年 上田こまち

夏休み 宿題やれと おこる母

伊野小 6年 中嶋 祐太

夏祭り きれいな花火 いっぱいだ

伊野小 6年 谷相 絢音

夏休み みんなでつくった 思い出だ

伊野小 6年 岩本 忠明

運動会 ダンスの練習 かんぺきだ

伊野南小 4年 中平 彩綺

秋になり すずきの音が きこえるよ

伊野南小 4年 岡林 優衣

「ごども川柳」は町内全小学校の児童のみなさんをお対象に募集しています。次回提出締め切りは11月14日(水)です。たくさんみなさんの応募をお待ちしています。(応募は各小学校を通じてお願いします。)

※選評は、川柳連会のみなさんをお願いしています。